



研究課題名

ドナウ派の風景画とその成立背景に関する研究

文化政策学部 芸術文化学科 藪田 淳子

図1: アルブレヒト・アルトドルファー《城のある風景》
1520-25年頃 ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク

皆さんにとって風景というものは、写真に撮ったり、絵に描いたり、とても身近な対象だと思っています。西洋で最初の風景画が描かれたのは16世紀のドイツだといわれており、正式なジャンルとしての風景画が成立するのは17世紀のオランダにおいてでした。東洋では、漢時代の中国で山水画が生まれ、日本でも平安時代にはそれが伝来していたことを考えると、かなり遅い成立だといえます。なぜ西洋では風景画が成立するまでに、これほど時間がかったのでしょうか。

西洋美術の源流である古代ギリシアでは人体が美の理想とされ、以後西洋では人物を中心にした神話画や宗教画が中心でした。そのため風景が描かれることは基本的になかったのです。ルネサンスの時代、イタリアで古代文化の復興運動がおり、自然の美が再認識され、ようやく風景表現が登場します。

図2: アルトドルファー《竜と戦う聖ゲオルギウス》
1510年 ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク図4: アルトドルファー《キリスト復活》
1509-16年頃 ウィーン美術史美術館図3: アルトドルファー《夕暮れの風景》
1522年頃 エアランゲン、
エアランゲン=ニュルンベルク大学図書館

なぜ美術の中心地イタリアではなく、ドイツで風景画が生まれたのでしょうか。現在のドイツを統治していた神聖ローマ帝国ではイタリアの影響を受けて人文主義思想が広まり、愛国的気運が高まりつつありました。ドイツの人文主義者たちは、学問と芸術の中心地をイタリアからドイツへ移行させることを目指しました。

本研究では、ドイツで風景画が描かれたことを、ドイツ人文主義とそれに関連する愛国主義と関連づけて考察しました。当時のドイツの宗教画には、繁茂する森や樹木が主要なモチーフとして描かれますが(図2)、これは古代ローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマニア』において、古代ゲルマン人が森を信

仰の対象としていたとする記述が注目を集めたことと関連すると考えられます。またドイツでは「樹木の聖母」の巡礼地が各地にあり、こうした土着の聖母信仰がある種異教的な樹木信仰と結びついたことも推定されます。最近注目しているのは、16世紀ドイツの宗教画に見られる朝陽や夕陽の表現です。アルトドルファーは、空を赤く染め、水辺や樹木を照らす印象的な夕陽の水彩画(図3)を描いています。こうした鮮やかな太陽の表現が宗教画にも見られるのです。とくにキリストの復活の場面(図4)の朝陽は象徴的です。聖書では、キ

リストの復活は朝に起こったとされ、聖書外典にはキリストが太陽に例えられているのですが、これほど強調された太陽の表現はこの時代のドイツに特有のものでした。私はこのような朝陽や夕陽などの気象表現が登場した背景を、16世紀ドイツで起こった宗教改革や終末思想から研究しています。

風景画には古今東西、様々な歴史があり、それぞれの地域の文化が反映されていて奥深いものです。きれいな風景や風景画に出会ったときには、そのなかに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

「令和8年度 静岡文化芸術大学 研究成果発表会」のご案内

教員特別研究で実施した研究成果を、地域や市民の皆様に広く発表し地域に還元することを目的として研究成果発表会を開催します。

日時 10月29日(木) 14:40～ 場所 静岡文化芸術大学講堂
入退室自由 YouTube配信実施

※本学駐車場はご利用できません。公共交通機関や近隣の駐車場をご利用ください。